

R時の認識の観点から見た日本語テンス・アスペクト の習得研究：イラストを使った文完成テストを用いて

崔, 亜珍
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4494707>

出版情報：比較社会文化研究. 30, pp. 55-65, 2011-09-15. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

非文末「ですね」の共起傾向に関する一考察

ガン
顔

ギョウ トウ
暁 冬

1. 問題の所在

コミュニケーション能力の育成がますます重視されてくる日本語教育では、「よ」や「ね」などの終助詞は、早くから習得すべきものとして、各教科書に取り扱われている。しかし、非文末の「ですね」の分析はあまり触れていないのが現状である。日本語教育において非文末「ですね」があまり重視されてこなかった理由の一つは、教科書の会話例はほとんど作例で、実際の談話例が少ないということだろう。実際の談話例のほうが、非文末「ですね」は使用される。たとえば、

(1) 57TYM4: 他何があるの? 食べた事無い。俺大体塩が旨いんだけど、

58YM4: あのですね、基本的にまあマヨネーズ入れたりするちゃんこもあるんですよ。

(2) 11TYM2: あ〜、元々良い身体でしょ? そうでも無かった?

12YM2: そうですね、学生時代陸上やってたんで。

近年、話し言葉が注目されるようになった。それに伴い自然会話に欠くことのできない終助詞に関する研究もさまざまな視点から行われてきた。しかし、このような一つの会話要素として、ごく普通のように使われている非文末「ですね」は、いわゆる「つなぎ言葉」としての意味合いしか持たないと捉えられ、その本質的なコミュニケーション機能、非文末「ですね」の共起傾向について及ぶことはなかった。また、単なる「ね」の間投用法に丁寧形「です」を付け加えた形とすることにも疑問の余地がある。

そこで、本稿では、丸山(2002)での「ですね」の分類基準を借りて、「ですね」が句点の直前に生じた場合を「文末用法のデスネ」、それ以外を「非文末のデスネ」として分類した。つまり、文中に現れる「ですね」形を非文末「ですね」と呼び、談話データによる使用例調査を中心に、その共起傾向を考察する。

2. 考察対象

なぜ「ですね」だけに絞って、分析することにしたか。

顔(2010)では、間投助詞「ね」の談話機能について考察したが、敬体「です」をつけて、「ですね」という言語形式は考察対象外とした。それは、非文末「～ですね」は間投助詞「ね」と違って、一種の慣用化表現へと変遷したと考えたからである。そして、小出(1983)によると、「そうですね」などの表現は話の丁寧度を上げる役割を果たす言いよどみの一種である。また、宇佐美(1999)では、「ですね」という言い方は既に「ね」抜きでは用いられない形で慣用化していると指摘された。以上の理由で、非文末「ですね」を間投助詞「ね」と別項目として、分析することにした。

本稿で扱う「ですね」は非文末に限定される。したがって、次のような後置表現の例は範囲外となる。

(3) 16YM2: もう腕立て伏せで。

17TYM2: あ〜。俺もね最近ね、腕立て伏せをやってるの、朝。

18YM2: ホントですか?

19TYM2: うん。あれね腕立て、あの、これお勧めですね、腕立て伏せ。

3. 先行研究

非文末「ですね」を一つの談話標識として取り扱う研究の数は多くない。丸山(2002)では間投用法「ですね」とフィルターとが出現環境に類似性があることを数量的に明らかにしている。宇佐美(1999)では、間投用法「ですね」の機能を言いよどみや発話を計画する時間を稼ぐための埋め合わせと捉え、富樫(2000、2004)はさらに、コーパスによる出現環境などから間投用法「ですね」に情報处理的側面があることを主張した。本稿では、丸山(2002)を取り上げる。

丸山(2002)は、話し言葉コーパス「あすを読む」を分析対象データとして、文中と文末の「ですね」について、出現数の分布、話者による偏り、出現位置の分布を分析

した。そのうち、「ですね」の出現数の分布を以下のよう
に示している。

「ですね」総数	間投用法	文末用法
412	259 (62.9%)	153 (37.1%)

上の表の結果に基づき、丸山は間投用法の出現数が文
末用法を上回り、全体の63%を占めたと指摘した。ま
た「ですね」という表現は、文末よりも文中で用いられ
る場合の方が多いと指摘している。

ところが、顔 (2010) での間投助詞「ね」の使用状況に
対しての分析結果を見るとわかるように、間投助詞「ね」
の使用は、談話参加者の年齢や社会地位などの要因に多
く影響を受けている。それらの要因を考慮せず、得られ
た分析結果に多少疑問を抱く。そこで、本稿は非文末「で
すね」の共起傾向を分析する際には、談話参加者の年齢
や、性別などの要素も含めて、考察することにした。

4. 非文末「ですね」の共起傾向

4.1 非文末「ですね」の使用状況

今回の計300分の談話資料を基本データとして、非文
末の「ですね」の使用頻度と割合をまとめた。それが表
1である。

表1 非文末「ですね」の使用頻度・割合

		「ね」総数	非文末「～ですね」	
			頻度	割合
タイプ1	TOM	64	0	0%
	OM	112	3	2%
タイプ2	TOF	72	1	1%
	OF	125	2	2%
タイプ3	TYM	62	0	0%
	YM	71	12	17%
タイプ4	TYF	84	0	0%
	YF	75	6	8%
合計		665	24	3.6%

表1で示したように、年代ごとの非文末「ですね」の
総合数に占める割合は、平均3.6%しか占めていない。
これは顔 (2010) での間投助詞「ね」の平均34%の使用率
と大きな差が見られる。

さらに、非文末の「ですね」の使用を年代別に分けて、
まとめると次の表2になる。

表2 非文末「ですね」の使用 —— 年代差

		非文末「ですね」		平均	
		頻度	割合	頻度	割合
O	OM	3	2%	2.5	2%
	OF	2	2%		
Y	YM	12	17%	9	12.5%
	YF	6	8%		

表2を見るとわかるように、この非文末の「ですね」
の使用は、年上は2%であるのに対し、年下は12.5%
であり、6倍の差が見られる。一方、顔(2010)において、
間投助詞「ね」の使用年代差は以下の表3が得られた。

表3 間投助詞「ね」の使用 —— 年代差

		間投助詞「ね」		平均	
		頻度	割合	頻度	割合
O	OM	67	60%	63	54%
	OF	60	48%		
Y	YM	3	4%	3	4%
	YF	3	4%		

表3には、間投助詞「ね」の使用は、年上は54%、年
下は4%であり、年上は年下の13倍も多いという結果
が示されている。つまり、表3には、表2とまったく違
う結果が示されていることがわかった。

従来、助詞「ね」を多用すると時と場合によっては、
なれなれしい、好ましくない印象を与えるなどと指摘さ
れてきた「ね」は主にこの間投助詞「ね」の使用である。
したがって、年下による使用はかなり制限が見られ、表
3のような結果になったわけである。

表2と表3との違う統計結果から、非文末の「ですね」
を間投助詞「ね」と別項目として考える必要があるこ
とがわかった。つまり、非文末「ですね」は間投助詞「ね」
と違う性質を持つ表現であると言える。

4.2 非文末「ですね」の共起傾向

前節の統計結果、また今回の談話用例を分析したとこ
ろ、非文末「ですね」の使用において、ある傾向性が見
られた。本節ではその指摘を行う。

傾向1: 「つなぎ言葉」との関わり

まず最初に指摘できるのは、非文末「ですね」の前後
に、「あの一」「まあ」などの「つなぎ言葉」が、よく現れ
ることである。たとえば、次のような例が挙げられる。

(4) 122YM4: いや、あの相撲はですね、あの固くこう
締める人と、柔らかく締める人がいるん

ですね。

123TYM4: あ～そうなの？

124YM4: はい。だから取ってすぐこうマワシを切りたい人は固く締めたり。

125TYM4: うん。

(5) 39TYM4: ちゃんこ開店して何年なる？もう1年、

40YM4: ああ、そうですね、まあ、2年近くなりますけど。

41TYM4: なるね。

42YM4: はい。

(6) 169TOF5: いえいえ、そう言う事おっしゃらずに、

170OF5: あのですね、あのー私そういう風にフランス語に夢中になってましたから、ある時期日本語がこうパッと瞬間忘れる時もあるんですよ。

171TOF5: うんうんうん。

下線部に示したとおり、「ええと」「あのー」「まあ」が非文末「ですね」の直前あるいは直後にかなりの頻度で現れることがわかる。これは、丸山(2002)の言う「間投用法のデスネはフィラーと極めて近い性質を備えている」という主張と一致したとも言えるだろう。

傾向2: 非文末「ですね」と待遇性とのかわり

次の傾向として、非文末の「ですね」は年下の話者が頻繁に使われていることが挙げられる。

前節の分析結果に示されたように、非文末「ですね」の使用について、年上よりも年下の話者は頻繁に使用しているようである。これは非文末「ですね」の待遇性に関わりがあるからと考えられる。

終助詞の待遇性に言及する論者は多く、ほとんどの場合は、終助詞の使用が人間関係の「親密さ」と結びついているという指摘がなされる。この問題を主題的に扱っている研究として、中西(1993:92)から引用し、分析する。中西は、終助詞の待遇性には「親しみの待遇性」を表すものと「礼儀の待遇性」を表すものの2種類があると説いている。非文末「ですね」の待遇性についても、この「礼儀」と「親密さ」で説明することができる。それは例えば:

「あのね」 → 「あのですね」
近(親密さ) 遠(礼儀)

のように、「あのですね」は「あのね」より、遠隔化的効果が発揮される。年下の話者が非文末「ですね」を多用する理由は、この非文末「ですね」によって、年下の話者は「礼儀」や「距離」を保ちながら、発話turnを維持することができるからであると思われる。そのような意味において、非文末「ですね」は話し手中心の表現である

とも言えるであろう。非文末「ですね」を使用することによって、話し手の心理的負担を最小限にするという役割も果たせる。このような役割を果たす非文末「ですね」については、年下の話者にとっては、便利な表現ではあるが、年上の話者にとってはあえて使用する必要性がないと考えられるため、使用率は低い。

傾向3: 「疑問代名詞+ですかね」という表現とのかわり

三番目の傾向として、「疑問代名詞+ですかね」という表現の場合である。

今回非文末「ですね」の談話機能を考察する際に、興味深いのはこの「疑問代名詞+ですかね」の使い方である。その実際の使用例は以下の(7)(8)(9)である。

(7) 9TYF4: これ見て茶髪のネエチャン達はあきらめる人もいるんじゃない？やっぱり。
やっぱり黒い髪が良い、良いのかなって言うて。

10YF4: どうですかね？あ～最近の高校生は割りと黒染めをする子が増えたって聞いたんですよ。

11TYF4: 更に染めるの？

12YF4: 黒く染めるって。あのブルーブラックの一番黒い色を入れる子もいるっていうの聞きましたよ。

13TYF4: へえ～

(8) 71TYF5: お花が好きって別に趣味じゃ。

72YF5: まあそうですね。

73TYF5: ございませんから。

74YF5: はい、香りに凝ったりとか、あとは何ですかね？まあマンガが好きだったり。少女マンガが好きだったり。

(9) 17TYF4: 茶髪もそろそろ流行遅れなんのかね？。

18YF4: どうなんですかね～？あのー

19TYF4: ねえ。

20YF4: でも茶髪、

21TYF4: 私にはもう全然関係ないですけどね。

22YF4: (笑)

(10) 104TYM3: 他なんか無い？やってみたいっての。

105YM3: 他ですか？

106TYM3: うん。

107YM3: 何すかね～？ああでも最近なんかジム、筋トレとか。

108TYM3: ああ。

さらに、今回の研究データを分析したところ、この表現を用いたのはすべて年下であることがわかった。年配

者の使用は一例もなかった。また、年下による非文末「ですね」の使用の18例のうち、このタイプの用法は8例で、二分の一近く占めたことがわかった。従来から、「ね」の終助詞と間投助詞としての用法が多く注目されていたが、この「疑問代名詞+ですかね」という表現を独立して扱う研究は少ない。

「かね」の独立した研究山田(1991)、橋本(1992)や、質問文の一例として扱った研究南(1985)では、「かね」は、「か」と「ね」の意味・機能の組み合わせによって説明されている。ところが、彼らの分析は作例に基づき、談話レベルでの分析はされていなかった。終助詞の使用は話し言葉の特有な現象と言われているので、終助詞を研究対象とするとき、実際の談話場面での分析を行わないとならない。また、宇佐美(1999)、丸山(2002)などの「ですね」の研究も、この「疑問代名詞+ですかね」には言及していない。

しかし、本稿において、最終目標としたいのは「かね」という表現の意味機能ではなく、非文末「ですね」の談話機能を究明することである。したがって、文末の「かね」を対象外として、今後の課題とする。

この「疑問代名詞+ですかね」という表現は、形式上からみると、「[疑問文]+ね」といった表現のように思われがちである。言葉の表層的にはそのように捉えられやすいが、果たしたコミュニケーション機能から見ると、「そうですね」や「あのですね」といった慣用化表現の非文末「ですね」の使用ときわめて近い性質を備えることがわかる。そのため、ここに、あえてこの「疑問代名詞+ですかね」を取り上げて、分析した。

もともと、疑問文は質問することによって、聞き手からその答えを得る表現である。しかし、上の例文を見るとわかるように、ここでの「疑問代名詞+ですかね」という表現は、相手に質問するというより、むしろ自分に聞かせているようである。そして、次の発言まで時間を稼ぐ、自己情報処理表現の一種であるとも考えられる。つまり、質問文といった「メタ表現」に「ですかね」という表現要素が付け加わることで、情報を自己処理する意味がもっとも強まったのである。

以上、非文末「ですね」が出現する状況や共起傾向などを分析した。

4.3 使用率低い理由

非文末「ですね」が上で示したような機能を持つとした場合、今回の分析した結果では、実際の談話例がそれほど多くない。それは何故だろうか。間投助詞の「ね」は一つの発話turn中で複数回使用されているが、非文末「ですね」にはそういう使い方はない。例えば

- (11) 121 TOF5: はあ～、それ直すのも大変でしたね。
122 OF5: いや、それがね、うちの夫がね、大変それ面白ってね直してくれなかったんですね。
- (12) 121 TOF5: はあ～、それ直すのも大変でしたね。
122 OF5: いや、それがですね??、うちの夫がですね??直してくれなかったんですね。

例(11)はごく普通の会話であるが、例(12)になると、不自然な文になって、冗長さを感じてしまう。その理由としていくつか挙げることができる。一つ目は、同じ発話turn内、自己情報処理マーカーという談話機能を果たす非文末「ですね」を多用すると、発話内容が分かりにくくなる。二つ目としては、それほど、「聞き手配慮」の必要性を感じない状況と判断されれば、非文末「ですね」の必要性が特にならない。この二点の原因によって、非文末「ですね」はあまり積極的に使用されていないのである。

5. おわりに

非文末「ですね」の共起傾向は以下のように記述できる。

傾向1: 非文末「ですね」の前後に「つなぎ言葉」となる表現が現れやすい。

傾向2: 非文末「ですね」は待遇性との関わりがあるため、年下の話者の方が、年上の話者よりも頻繁に使用しているという傾向が見られる。

傾向3: 「疑問代名詞+ですかね」という表現は「そうですね」や「あのですね」といった慣用化表現の非文末「ですね」の使用ときわめて近い性質を備えていることがわかった。

参考文献

- 国立国語研究所(1951)『国立国語研究所報告3現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』秀英出版。
- 神尾昭雄(1990)『情報のなわ張り理論』大修館書店。
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版。
- メイナード, 泉子・K(1993)『会話分析』くろしお出版。
- 伊豆原英子(1994)「感動詞・間投助詞・終助詞「ね・ねえ」のイントネーション—談話進行との関わりから—」『日本語教育』83 pp.96-107 日本語教育学会。
- 宇佐美まゆみ(1997)「「ね」のコミュニケーション機能とディスコース・ポライトネス」現代日本語研究会(編)

- 『女性のことば・職場編』 pp.241-268 ひつじ書房.
- 神尾昭雄 (1998)「情報のなわ張り理論：基礎から最近の発展まで」 中右実 (編)『日英語比較選書2 談話と情報構造』 pp.1-111 研究社出版.
- 富樫純一 (2000)「非文末「ですね」の談話語用論的機能—心内の情報処理の観点から—」『筑波日本語研究』 5 pp.70-91 筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室.
- 野田春美 (2002)「終助詞の機能」宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃『新日本語文法選書4 モダリティ』 pp.261-288, くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2003)『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』 くろしお出版.
- 篠田 裕 (2005)「日本語の助詞「ね」の対人的機能とあいづち—その日本的コミュニケーションスタイルに果たす役割—」『比較文化研究所年報』 21 pp.7-21 徳島文理大学比較文化研究所.
- 丸山岳彦 (2007)「デスネ考」, 串田秀也・定延利之・伝康晴 (編)『シリーズ文と発話第三巻時間の中の文と発話』 pp.35-65, ひつじ書房.

An Analysis of the Co-occurrence Tendency of the non-final “*Desu Ne*”

Xiao-dong YAN

It is well known that the Japanese language possesses a large set of sentence-final particles which typically occur in conversations. They are signals of the speaker’s various sentiments. The sentence-final particle “*ne*” is compared to “*yo*” in analyzing its usage. This paper discusses the co-occurrence tendency of the non-final “*desu ne*”. The first attempt of this paper is made to clarify the co-occurrence tendency of the non-final “*desu ne*”. In the first part of this paper, I attempt to clarify the usage of the non-final “*desu ne*”. I taped an interview program and used it as a document for analysis in this article.

The results show a tendency for the non-final “*desu ne*” to appear alongside fillers.

In conclusion I suggest “*desu ne*” be introduced initially and treated positively in the teaching of Japanese.